



大手前大学  
大手前短期大学リポジトリ

## リベラルアーツと C-PLATS

著者	高村 麻実
図書名	大学教育改革研修 これからの大手前大学 C-PLATS を座標軸に据えて
開始ページ	38
終了ページ	45
出版年月日	2011-10-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1160/00000212/">http://id.nii.ac.jp/1160/00000212/</a>



1 日目  
第二部

# リベラルアーツと C-PLATS

平成23年3月10日(木)  
於・シーサイトホテル舞子ビラ神戸



教務部長  
高村 麻実

よろしくお願ひします。教授会その他で私の声ばかり聞かされて、聞き飽きたという先生がたくさんいらっしゃるのではないかと思います。たびたび登場いたします。高村でございます。

本日は「リベラルアーツとC-PLATS」というタイトルで話をさせていただきますが、当初は、「これからの大手前大学」という大きなテーマがありますので、「これからのリベラルアーツ」というタイトルで話をせよという依頼がありました。ただ、これからのリベラルアーツとはいったい何なのか。リベラルアーツというものは、もともとあったわけで、それを大手前大学が導入したのです。ところが、どうも本学は「ユニット自由選択制」という名称は受験案内等に出ています。リベラルアーツはあまり浸透していないのではないかとこのように感じることもございました。ですから、これからのリベラルアーツではなくて、「本来こうでなければならなかったリベラルアーツ」という話になるのではないかと思います。

したがって、これから新しいことを始めようというのではなく、今までやってきたことをもう一度確認して意思統一することのほうが必要だと考えてお話をさせていただきます。リベラルアーツについてもう十分理解しているという人にとっては、それほど新しい話でもないし、そんな話に30分も付き合わせるのかとお叱りを受けるかもしれません。ただ、リベラルアーツ型教育のプログラムを作る過程で、いろいろと議論に加わっていらした方はかりでなく、ここ1、2年で就任した先生方もいらっしゃると思います。そういう先生方も含めて、また事務の方もいますので、そういうスタッフも含めて一緒にもう一度リベラルアーツというものについて復習し、そこにC-PLATSというものをどういう風に組み入れていくのかということと議論するためのたたき台として、お話しさせていただきますと思います。

じつは、私の前任校は、もともとリベラルアーツ教育という

## リベラルアーツと C-PLATS

平成22年度 大学教育改革研修

大手前大学

### お話しする内容

大手前大学

- ◆リベラルアーツとは
- ◆リベラルアーツとC-PLATS
- ◆C-PLATSと成績評価
- ◆全学的な取組とするために

ものに力を入れてきた大学でございます。ご存じのとおり、去年の3月まで桜美林大学におりました。おもしろいのは、大手前大学と同じように、学園ができたのが1946年、また大学ができたのが1966年、リベラルアーツ学群を作ったのが2007年、ということで、歩みとしては大手前大学と似ているのです。どこが違うかというと、最初から男女共学だったということくらいです。その中で私は、自分の母校でもあり、そこで育ててまいりましたから、リベラルアーツというのはとくに新しく感じるものではありませんでした。しかも私は、ご存知だと思いますが、かつて中国語を専門にしており、大学4年間はずっと中国語を身につけるということに徹しておりました。ところが、伝統的な学問をやる先生は、たとえば中国文学の先生は、「語学だけできてもだめだ」、「文学もちゃんとやらなさい」ということになるわけです。中国語の教員にはウケが良かった私も、中国文学の先生からすると「あいつはちゃんと学問をやってない」という目で見られていました。ただ、私が在学中に全国の中国語弁論大会で優勝したときには、中国文学の先生も「あれは私の教え子だ」と吹聴していましたけれど……。何が言いたいかと申しますと、私は大学時代、自身の中国語の訓練と、後輩の養成に没頭し、学問らしい学問はしていませんでした。これがリベラルアーツだという思い込みをしながらも、心地よい大学生活を送っておりました。

先生方にとっても、もう十分理解しているということになるかもしれませんが、きょうは4つのことについて無理矢理考えてまいりました。さきほどの理事長のお話、それから蘆原先生のお話により、大手前大学がリベラルアーツ型教育を必要としている理由といえますか、背景はご理解いただけたことと思います。そこから少し戻って、「おさらい」として「リベラルアーツとは」。それから「リベラルアーツとC-PLATS」をどういうふうに考えるか。これは蘆原先生のお話の中に十分入っていましたが、もう一度私の考えも含めて申し上げます。それから、成績評価について。そして全学的取り組みとするためのお願いということで進めます。

### 1. リベラルアーツとは

まず「リベラルアーツとは」というところですが、これはもうおわかりですね。リベラルとアーツですから、自由人のアーツ、自由人の学芸というのがこの言葉の起こりですね。これは復習です。自由人というのは社会の支配者。人にこき使われる人間ではなくて、人を使うことのできる人間、それを

## リベラルアーツとは

大手前大学

### リベラルアーツとは 大手前大学

#### ◆自由人のアーツ (学芸)

自由人＝社会の支配層

「社会を担い、人を指導する人間として習得しておかなければならない知的基礎的能力」を身につける

STUDY FOR LIFE  
Study for life

### リベラルアーツとは 大手前大学

#### ◆もともとはエリート教育

大学の大衆化

一般市民のための教育

従来の「一般教養」との誤解

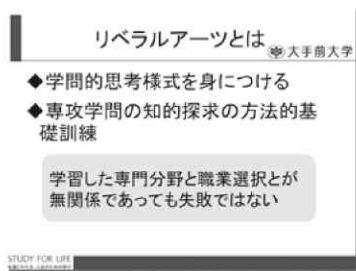
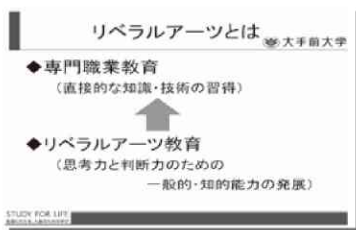
STUDY FOR LIFE  
Study for life

### リベラルアーツとは 大手前大学

#### ◆専門職業教育 (直接的な知識・技術の習得)

#### ◆リベラルアーツ教育 (思考力と判断力のための 一般的・知的能力の発展)

STUDY FOR LIFE  
Study for life



育てていく学芸というのが、語源ということになります。つまり、社会を担い、人を指導する人間として習得しておかなければならない知的基礎的能力、これを身につけるというのがリベラルアーツ教育の目的です。本学では「リベラルアーツ型」といっています。ここでわかりやすいですね。知識ではなく、能力です。ここが非常に重要な部分です。このリベラルアーツ教育というのはヨーロッパで始まった考え方で、もともとはエリート教育です。ところが、第二次大戦後、大学が大衆化しました。そこで、一般市民にも、社会に出るために必要な知的基礎的能力を身につけさせなければいけないということで、エリートだけでなく一般市民のための教育でもあるというふうに変りました。それが「一般教育」とか「一般教養」というように翻訳されるようになり、そこで「専門ではない科目」という誤解が生じたわけですね。「履修ガイド」や「中期計画」に「大手前大学はリベラルアーツを一般教養とは解しておりません」と書いてありますが、じつは当たり前のことです。従来の大学における「一般教養」というのは、もともと違うのです。

このリベラルアーツ教育と専門職業教育との2つは、対峙しているように見えます。専門職業教育というのを直接

的な知識、技術の習得と定義すれば、これとリベラルアーツ、つまり思考力と判断力のための一般的知的能力の発展とは、それぞれ対峙、対決しているように見えるかもしれませんが。たしかに、専門職業教育だけ、リベラルアーツ型教育だけ、そだけをみているとそうかもしれません。しかし、実際には専門的な技術や知識を身につけるためには、その大本の、身につけるための能力があらかじめ養われていなければいけません。知識がなければ能力は身に付きませんし、能力を身に付けた上で新たな知識を得るといって、そういう回転が必要です。ですから、専門職業教育は、リベラルアーツ教育と敵味方の関係にあるわけではありません。思考力と判断力のための一般的知的能力の発展の結果、さらに専門につながるということは、これは何も不思議なことではないということになります。

リベラルアーツ型教育を行う科目の一つ一つは、すべて専門科目です。その専門科目を用いて幅広い教養を身につける、能力を身につけるといって考えます。学問的思考様式を身につける、それから専攻学問の知的探求の方法で基礎訓練を行うことによって、学問との学術との一体を感じ取り、繰り返すことによって、先ほど蘆原先生のお話にもありましたが、自分でもできるのだという自信につなげるような教育を行うというのがリベラルアーツ型教育の目的です。したがって、学習した専門分野と職業選択が無関係でも、失敗ではないわけです。歴史を学んだ人が歴史学者にならなければ人生の落後者かといえば、そうではないわけです。そういう歴史の学びを通して、一般的な本学で目指すところのC-PLATSの能力を身につけていけばいいわけです。ですから、その学問としての専門家を養成するというよりも、学問というものを通していろいろな能力を身につけていく。たとえば大阪から東京に行くのに、電車で行く人もいます。新幹線で行く人もいます。それから車で行く人もいます。夜行バスに乗る人もいますし飛行機で行く人もいます。船も使います。そういう違いがある意味メジャーの違いです。目指すところは、そういう違いがあるわけではありません。これが学士課程教育であり、さらにメジャーを専門的に勉強したいのであれば、さらに上の学校に行けというのがそもそもの考え方です。

## 2.リベラルアーツとC-PLATS

さて、ただいまのは復習でしたけれども、それではC-PLATSをリベラルアーツとどう結びつけて考えていくべきでしょうか。まず、本学において、メジャーとリベラルアーツが

どういふことを要求されるか、どういふことを目指すことになるのかを考えましょう。メジャーによって異なるもの、メジャーごとに何が違うのか。つまり、どういふことが身につくという点で他のメジャーと違うのか、という点では、まずは知識です。たとえばビジネスなら、ビジネスの知識やビジネスに関する技術といったものを、そのメジャーで身につけることとなります。また、建築の技術や知識は、建築のメジャーで学ぶこととなります。これに対し、特定のメジャーでなく、どのメジャーでも得られるもの、言い換えればリベラルアーツで身につけるべきもの、これが能力や意欲ということになります。どのメジャーにおいても、能力の必要性は、さきほどから話題になっているとおりで、これこそが今回のテーマです。

C-PLATSの能力は、どのメジャーでも得られるということになりますが、なぜ様々なメジャーがあるのかというと、身につく知識や技術がメジャーごとに異なるからです。メジャーの中で学ぶ知識や技術を通して、能力を身につけていこうと、そしてそのツールとしてC-PLATSというものが意識されるのだというふうには私は考えます。一つ例をあげますと、国際基督教大学の英語教育として、有名なELP (English Language Program) というプログラムがあります。英語の授業というと、ふつうは聞く、話す、読む、書くという4つの言語活動の能力を身につけると考えがちですが、ICUの英語教育は、英語を使用して客観的思考能力、批判的分析思考能力、主体的問題設定・問題提起へ向けての思考能力、問題解決への思考能力、論理構築のための思考能力や、自己表現へ向けての思考能力を身につけることを目的としています。英語を使っているというディスカッションしたり、発表したりすることによって、チームワークを築きながら、コミュニケーション能力や、様々な思考能力を身につけるといふことが目的となっているのです。本学においても、専門的な学術内容を通してC-PLATSの能力を身につけていこうというのが、進むべき方向であるということです。

ただ、私が自分で担当している授業は、ただいま申しましたことと大きく矛盾しております。私は外国語を担当しておりますが、「中国語I」の授業では、これから発音だと単語を覚えようという段階で、中国語でディスカッションなどと言ってもできないわけです。このような授業でどのようにC-PLATSの各能力を身につけさせるのかということとは、これからもっと勉強していかなければなりません。中国語が全然話せなくてもC-PLATSの能力が身につけばそれでいいのだと言えるでしょうか。初めて習う外国語や、スポー

## リベラルアーツと C-PLATS

大手前大学

### リベラルアーツとC-PLATS

メジャーとリベラルアーツ

- ◆メジャーによって異なるもの  
→ 知識・技術
- ◆どのメジャーでも得られるもの  
(リベラルアーツで身につけるべきもの)  
→ 能力・意欲

STUDY FOR LIFE

World Education

### リベラルアーツとC-PLATS

メジャーとリベラルアーツ

- ◆ 専門教育で学ぶ知識・技術を通して、能力を身につけよう！  
↓  
◆ C-PLATSはそのためのツール  
→ 能力・意欲

STUDY FOR LIFE

World Education

### リベラルアーツとC-PLATS

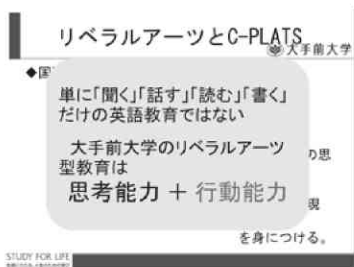
◆国際基督教大学(ICU)の英語教育  
ELP (English Language Program)

英語学習を通して

- ①客観的思考能力
  - ②批判的分析思考能力
  - ③主体的問題設定、問題提起へ向けての思考能力
  - ④問題解決への思考能力
  - ⑤論理構築のための思考能力と自己表現へ向けての思考能力
- を身につける。

STUDY FOR LIFE

World Education



ツ科目においてC-PLATSはどうするかと、いろいろなことを今後議論していかなければならないと思います。

さきほどのICUは、英語を通して4つの思考能力を身につけるということでした。あくまでも思考能力にとどまっていますが、大手前大学のリベラルアーツ型教育というのは思考能力だけではなく、思考基盤の上に行動基盤が積み上げられています。つまり、行動能力まで身につけるように教育しているという考え方で、このC-PLATSが組まれているということです。このように、リベラルアーツと能力開発は、当然のことながら非常に強い結びつきがあり、その能力をどう開発していくか、どういう能力を意識していくのかについて、大学の独自性が出てくると思います。

### 3.C-PLATSと成績評価

さて、実際に授業を行い、能力を身につけさせるべく教育活動を行います。そしてその結果として、学生の成績を評価することになります。では成績評価についてどう考えるか、言い換えれば能力をどう評価するかという問題について考える必要があります。つまり試験の方法を開発しなければならず、これまで知識の試験が多く行われてきたのに対し、C-PLATSの能力をきちんと評価できる試験を考えなければならなりません。

評価の方法として、相対評価か絶対評価かといったことも議論されていると思いますが、GPA制度を導入し、またシラバスのなかで成績の評価基準を示している以上は、相対評価というものは困難だと考えます。それから、絶対評価のなかでも、同一基準の評価にするのか、個別の評価にするのかという問題も検討しなければなりません。同一基準の評価というのは、完全な絶対評価ということです。同じテストを受験して、同じ点数なら同じ成績がつくということです。そ

の学生一人一人にもともあつた資質や能力は全く問わないで、一律に成績をつけるというやり方です。この方法によるのか、それとも、たとえば1から10までの能力で、2の能力しかなかった者が5に伸びれば「B」と評価し、逆に8の能力を持っているはずの者が7の努力しかなかったら「C」と評価する方法によるのか、十分に検討する必要があります。後者の方法によれば、成果と成績が逆転することになり、個人的には疑問ですが、少なくともC-PLATSの能力をどのように評価するのか、また評価できるのかということは、まだ十分に議論されていません。

ただ、少なくとも能力を100点法で評価できるのかということについては、疑問を持たなければいけないことは確かです。レポートとか論述式試験で点数を付けるときに、たとえば漢字1字間違えたら1点減点とか、そんな採点で能力を測ったことになるのでしょうか。「漢字を正しく書くのも能力だ」という意見があるかもしれませんが、それは正しい字を知っているだけのことです。つまり、それは知識でしかなく、能力ではありません。字をきれいに書けるかどうかも、技術にしかすぎませんね。ですから、能力を評価するという趣旨からすれば、かなり大雑把な採点になります。大雑把といっても、いい加減に採点するというのではなく、「要求を満たしているか」、「優秀か」、さらに「もう一步自分なりの工夫があるか」、逆に「もう少し努力をすべきか」。こういう評価をせざるを得ないことになります。そのためにあるのが、ご覧のとおり評語による成績評価です。「履修ガイド」とは異なり、あえて小学校のように書きました。わかりやすく言えばこんなことです。「たいへんよくできました」というのが「A」です。「よくできました」が「B」です。「できました」が「C」で、「がんばりましょう」が「D」。そして「やり直しましょう」が「F」です。「できました」以上であることが必要なので、「がんばりましょう」ばかりで124単位を修得してもダメということです。だからGPAが1.5でないといふ卒業できないというルールになっています。また、さきほど話があつた秋田の大学では、2.0でないといふ卒業させないといふのは、平均が「できました」以上であることを要求する、いわばGPA制度としては当然のことです。ここでGPAの議論をするつもりはございませんが、何が言いたいのかというと、100点法で点数を付けるのではなく、ざっくりと要求を満たしているのかどうか、さらに一步、要求を超えた努力をしているか、というようなことでしか能力を測ることはできず、成績評価の方法を再検討すべきだということです。

たとえば従来型の試験として、定期試験期間があったと思います。じつは私の前任校は、2003年から定期試験期間を廃止しました。2002年度に決めて2003年からスタートしました。定期試験の期間をなくして15週の授業を行うということは、15回の日程を確保するためだけではありません。私の基本的な考えとしては、定期試験期間を設けることは、最後の「一発試験」だけで成績を評価する可能性につながり、それが問題だということです。さきほど蘆原先生のお話の中で、毎週毎週だったか、隔週でレポートを課して、それも評価のなかに加えるということでした。私も毎週試験を行います。最終回だけが試験ということではなく、毎回毎回が試験だと考えれば、試験は最後に行うものとは限らず、むしろ最後から2回目に試験を行い、最終回には試験の結果を示しながら解説するという方法もあります。そのあたりは、教員が工夫すべきことだと考えるのです。

また、たとえば、学生がレポートを提出します。これもレポートという試験になります。そのレポートを見て、その出来具合で成績を評価するというのが、たぶん従来のやり方だと思います。しかし、リベラルアーツ型教育をしっかり行うのであれば、本来はもっと学生とキャッチボールをしなきゃいけないわけです。たとえばA4で3枚以上書いてきなさいと指示し、その指示どおりのレポートが提出されたとき。中身はいろいろと問題があるけれども、とりあえず一定の評価はできるということで、従来はそのまま成績報告をしたものと思います。しかし、さらにキャッチボールが必要です。その学生を呼び出して「このままだったら評価は「C」だが、さらに参考資料をいくつか調べて修正すれば、「B」になる可能性がある」と、3日間ほどの時間を与え、その要求を満たしたかどうかを評価に加えるなど。そういったキャッチボールをしながら、能力を身につけさせていくのです。一度の結果だけで点数を付けるのではなく、能力を育てながら評価をする。そうすると、さきほど申しましたように、100点法では対処できません。1字間違えたら1点減点とか、穴埋め式試験などでなければ、厳格な100点法は困難です。つまり、GPA制度のもとでは、100点法を評語に置き換えるのではなく、最初からABCDFの5段階評価でしかありません。ただ、学生の成績を客観的に示す指針が必要ですから、GPAという数値を出すのです。100点法を5段階の評語に直して、またそれをGPAに直すなんて、そんなばかげた話はないわけです。100点法にこだわるなら、最初から100点法のまま平均値を出せばいいわけですね。

## C-PLATSと 成績評価

大手前大学

### C-PLATSと成績評価

大手前大学

- ◆成績をどう評価するか
- 相対評価
- 絶対評価
- 同一基準の評価
- 個別の評価

能力は100点法(素点)で評価できるのか?

STUDY FOR LIFE  
LIFE THROUGH STUDY

### C-PLATSと成績評価

大手前大学

- A たいへんよくできました
- B よくできました
- C できました
- D がんばりましょう
- F やりなおしましょう

成績評価の方法を再検討

STUDY FOR LIFE  
LIFE THROUGH STUDY

## 全学的な取組と するために

大手前大学

なぜ5段階評価やGPAを採用したのかを念頭に置き、成績評価の方法を再検討していかなければなりません。みなさんで一緒に議論していくうえで、大切なポイントであると思っています。

#### 4. 全学的な取組とするために

さて最後に、全学的な取り組みとするために、お願いいたします。教授会ではいつも教員が中心ですが、きょうは事務職員の主任以上の方も参加しています。これは先ほども理事長のお話にありましたけれども、教職員の一体化です。ぜひC-PLATSに関して、事務職員の皆さんも熱く語れるようになっていただきたい。きょうは主任以上ということですが、この研修で得た成果を、きょう来ていない職員の方々にお伝えいただいて、たとえば非常勤の先生からC-PLATSのことについて教えてくれと言われたら、「先生に聞いてください」というのではなく、自分の言葉できちんとこのC-PLATSに関して伝えるプレゼンテーション能力を身につけていただきたいと思っています。

大学行政管理学会の研究会で、以前、SDIはどのような要素が必要なのかという研究報告がありました。これからの大学職員は、コミュニケーション能力、問題発見能力や、論理的思考力を身につけなければいけないという報告でした。それって、いま私たちが大学生に身につけさせようとする能力ですよ。それが身につけていない人たちが大学職員が構成されているとしたら、こんな悲しい話はありません。こういうことを言うのが怒られますけれど、大学教員よりも職員のほうが社会常識を身につけているわけです。ですから、C-PLATSの導入を全学的な取組とするためには、教員も事務職員も、さきほどいただいたこのC-PLATSのカードを常にポケットに入れて、C-PLATSについて熱く語るということが必要になってくるのではないかと思います。そうすることによって、たとえば論理的に学生に説明するとか、これ窓口対応には必要ですよ。

たとえば、指定された場所以外でたばこを吸うという規則について、なぜかと学生に聞かれたときに、「これは決まりだから」というだけでよいのか。決まりをきちんと守らせることは必要ですが、単に決まりだからということではなく、なぜかということと説明し、大手前大学の価値はここで判断するということを理解させなければいけないわけです。さきほど蘆原先生が言ったように、答えは一つではありません。たとえば、「学内の環境を保つため」という趣旨で

あれば、その解釈の結果として、「外で吸えばよい」という教育になるわけです。ところがそうではなく、副流煙の問題として「周りの人の健康を害しない」という趣旨であれば、「人がいないところで吸いなさい」という結論に導かれます。さらに、そうではなく、たばこを吸うこと自体が健康に良くないという理由で、「あなたの健康を守るため」という趣旨であれば、「たばこをやめろ」ということになりますね。なぜかと聞かれたときに、決まりだからというのではなく、趣旨を十分に理解し、疑問に答えられなければいけません。教務でもそうです。GPAはなぜ導入されたのでしょうかと聞かれたとき、評議会で決まったからなどという答えはダメですね。きちんと趣旨から、異口同音に語れなければなりません。国によっては「偉大な將軍様が決めたから」でもよいかもしれませんが、大学全体できちんと理解して、きちんと趣旨を学生に説明できなければいけません。教員も事務職員も、一緒にこの取組を成功させていくために、努力しましょう。

これが私のお願いでございます。今後とも、成功のために、前向きに努力いたします。どうぞよろしく申し上げます。ありがとうございます。

#### ●尾崎先生一

今お話いただいた高村先生のお話のなかで、ちょっとわかりにくいところがあり、一つ教を願いたいのですが。成績評価方法のことなのですが、100点の素点法ではなくてそれはシラバスの今初歩的なものを使っている。それは非常にわかる話で重要だと思うのですが、それをお話いただいたABCDFの形で来年導入していくということなのですが、そこがちょっとわからないといいますか、どういう基準になるのか。結局はそれはわれわれ教員のほうの主観になりませんか。非常に怖いというか危険な話をしていないかと。たとえば小中学校なんかでも成績評価方法の導入で主観的なものを取り入れましょうという考えがあります。実際に行っているのはシラバスと一緒に、同じ科目で同じテストをしてある生徒は78点でした。もう1人の生徒は82点でした。素点法でいけば82点のほうがいい成績なのですが、いわゆる数値法でいくと逆転した。それを親御さんがなぜかと聞きにいった際に、今の評価方法は数字上だけではない。授業態度等々の評価を入れて付けたことになるのですとおっしゃったのですが、ではそれは何を基準にしてそうなったのですかと聞かれたときに、ある中学校の先生ですが、その基準は言えません、わかりませんと。それでいいのです。くつらぶらになったという話を聞くのです。それを全学で話して



いきましようというご提案なのだと思いますが、評価の話だけ見てみるとそうしたやや主観化してしまうかなという危惧もぬぐえないところがあります。もう少し補足でご説明いただけるようでしたらお教えいただくとありがたいですけれども。

#### ●高村一

はい、ありがとうございます。まさに最後におっしゃっていただいたとおりでございます、こういうことをきちんと全学で話し合っていくということを、今後していかなければいけない。つまり成績評価の仕方は、一つではないわけですね。どこの何に、何を価値基準として成績の評価をするのかということ、みなで考えていかなければならない。ですから先ほどの蘆原先生のご説明を聞いて、「伸びて見る」というのが大手前大学の今後の結論になってしまっているのかというような、ある意味不安に感じた先生がたもいらっしやるのではないかと思います。

それはまだ結論になってはいません。能力をどのように成績評価に取り入れていくのか、同じ絶対評価の中であっても一律同じ基準で成績評価を付けるのか、それとも個別の学生ごとに伸びだとか態度とかそういったことも評価基準に入れるのか。言い換えれば、「伸び」などで大学の成績評価が行えるのかという疑問についても、きちんと話し合って意思統一を図っていくということを、今後していかなければいけないという問題提起として申しあげたまででございます。

#### ●尾崎先生一

もう一つだけ。もう3月10日という段階なのですが、今日お話しされたことは次の4月に入ってくる1年生から導入されるという前提なのでしょうか。それとも今後のもう少し長期的に考える課題だという認識でよろしいのでしょうか。ちょうど今の時期から4月に入ってくる1年生だと思うのですが、複雑なものをあまり性急に決めるのは可能なのかということをお考えいただけますか。

#### ●高村一

教務部長という立場から話をしたため、どうしても4月からやるのかという疑いをもたれがちですが、一人の「GPA評論家」として問題を提起したまでです。あまり議論を先延ばしすることは望ましくないのですが、まずは検討を要するポイントについて問題提起をいたしました。「能力を評価しましよう」ということ、現行の成績評価制度との間で矛盾が生じていると指摘したかったのです。

今から間に合わせようという話でなく、本来はもっと早くから検討しておくべきだったという反省の意味を込めて申しあげました。

#### ●尾崎先生一

結局この4月に導入するのですか。

#### ●高村一

この4月から導入するという前提でお話しているのではありません。もっと早くから検討していれば4月から導入できたかもしれませんが、後手に回ってしまっていますということです。いずれ検討しなければいけないので、先生方にお知恵をお貸しくださいとお願いしたところです。

#### ●司会一

ほかにご質問がなければ、時間も押しておりますので、最後に川本学長から、コメントをいただきたいと思います。

#### ●川本学長一

朝からお話をうかがっていて蘆原先生のお話に対して石毛先生と先生がご質問されて、今、尾崎先生からご質問されましたけれど、これから午後、先生方が議論していただくえにははっきりどこかの時点で言っておいていただきたいことがあって、ここまでは退かない、たとえばC-PLATSというのは特許でこれは退かないけどそのエレメンツ、芦原先生が説明されましたけれど、そのどこまでは退かなくて、その先に先生がたでどう話し合っていたかという部分との差。それから今、尾崎先生が言われた本当に4月からやる分と4月から当面こういう形でやる、それを先生がたが考えてほしいという点と、先まだゆっくり考えようという点をはっきりしないと、毎年先生がたに話し合っていたかという点と、ずっと立ち消えになるのでは今年遅いと思うのです。やはり少し性急すぎるけれど今年これだけはやっておかなければいけないことはしなければとさっきお話しいただき、私は賛成ですけれども、現状認識を今やらなければいけない。ずっと私もそういうことを言い続けてきて、これまで大手前は、間違った道をたどってなかったとは思いますが、今ぜひやらなければならぬこととそうでないことは、少なくともこうして提起したからには、みなさんに問題を投げかけるときにここまで考えてくださいとか、ここまでは規定のものとしてくださいとか、そういうことが必要ではないかと思えます。